

大阪は「まち」がほんまにおもしろい



安けく治むる川・安治川を作った豪商

～大阪の恩人・河村瑞賢ものがたり～

九条島はたびたび淀川の氾濫に苦しめられ、貞享元年(1684)、河村瑞賢が治水工事に着手。「安らかに治まるように」との願いで安治川が作られました。安治川の完成で、市中への船の出入りが容易になり、大坂は天下の台所として大繁栄。また明治以降は江之子島政府、川口居留地が作られ、文明開花の息吹を伝えました。近世大坂から近代大阪へ！安治川を辿りながら水都の変遷を探ります！



① 安治川トンネル (安治川河底隧道)

昭和19年(1944)に完成した日本発の沈埋(ちんまい)工法を採用したトンネルです。トンネルができる前は、「源兵衛渡し」とよばれる渡し船で兩岸は結ばれていましたが、陸上交通量の増加に渡し船では対応しきれず、また大型船の航行に支障となるため橋をかけることも難しかったため、トンネルが作られました。完成当時は、歩行者用エレベーター2基、車両用エレベーター2基、歩行者用階段を備えていましたが、排気ガスの問題等で現在は歩行者・自転車用のみで共用されています。

② 下町ジオラマ (株式会社ディグ内:非公開)

「明治」「大正」「昭和」の激動の時代を一生懸命生きた、「名もなく、貧しく、したたかな庶民達」を主人公に作成されたジオラマです。立体写真のように切り取られた人々の生活や子供たちの遊び、物売り、今ではもう見られなくなった日常道具の数々から郷愁や哀愁、生活の匂いを感じられます。現在は非公開ですが、将来は常設展示を行い、世代を超えて人々の交流の場にしたいと計画中です。

③ 河村瑞賢紀功碑、古川跡

九条島はたびたび淀川の氾濫に苦しめられました。貞享元年(1684)、幕府の命により、河村瑞賢は九条島の治水工事に着手し、淀川を大阪湾に向かってほぼまっすぐに流し込む新しい水路を開削しました。この水路はしばらく「新川」と呼ばれていましたが、この地が「安らかに治まるように」との願いより、安治川と名付けられました。安治川を利用することにより市中への船の出入りが容易になり、大坂は天下の台所として大いに繁栄しました。紀功碑は大阪城築城の際、川底へ落ちた「残念石」を引き揚げて利用しています。「古川跡」は安治川開削前に流れていた水路で、終戦後、大阪府の防潮堤工事のために埋め立てられました。

④ 三井倉庫、富島倉庫

明治初頭、このあたりに外国人居留地が設けられ、開港場となると、大阪に入ってくる貨物のほとんどは安治川を上って当地区で荷揚げを行い、貿易の拠点として非常に賑わいました。船会社の事務所や輸出入業者の倉庫などもたくさん建ち並び、当時をしのばせる赤レンガ造りの倉庫が今もまだ残っています。

⑤ 富島渡し跡

かつては上流に安治川橋がかかっていましたが、明治18年(1885)の淀川大洪水で大阪市中の橋が流され、安治川橋に引がかかったのが爆破。以後、付近に橋が架けられることはなく、対岸を結ぶ「富島の渡し船」が運行されました。昭和6年(1931)に中央卸売市場が開設されてからは、市場に通う多くの仕入れ商人が乗船していました。その後、自動車の普及により利用者が減少したため、昭和57年(1982)にその役目を終えました。

⑥ 太閤さんの残念石

大阪城築城の際、石垣に使用するために切り出された巨石で、何らかの事情で役目を果たせなかったものを残念石と呼んでいます。ここでは運搬中に安治川に落ちた巨石を引きあげて倉庫の壁の一部として使用しています。

⑦ 川口運上所跡、大阪開港の地跡、大阪電信発祥の地跡

慶応4年(1868)5月1日、川口運上所(大阪税関の前身)が開所しました。当時の運上所は現在の税関事務所と外交事務所を行っており、五代友厚が外国官判事に就任し、運上所の事務を行うようになりました。また同年7月15日には大阪港を開港。開港後、運上所の西側に長さ83メートル、幅9メートルの川口波止場を整備し、河口に400間(約720メートル)の堤を築きました。続いて明治3年(1870)には川口電信局が開設され、日本最初の電信線が神戸まで架設されました。

⑧ 外人雑居地の跡、富島天主堂跡

川口には居留地とは別に雑居地が認められ、日本人と雑居する多くの中国人が住んでいました。これら中国人の経営する中国料理店、理髪店など当時は物珍しく、大阪名物の1つとなりました。富島天主堂はフランス副領事レックの請願に基づき、明治12年(1879)に完成したカトリック礼拝堂です。本格的な赤レンガ造りのゴシック様式の建物で、当時を代表する洋風建築でした。

⑨ 安治川橋の碑(磁石橋)

明治6年(1873)に架けられ、橋の中央二径間は西欧から輸入された鉄橋で、高いマストの船が航行する場合には、橋桁が旋回する可動橋でした。当時の人々はこの旋回する様子を見て「磁石橋」と呼び、大阪名物でした。しかし明治18年(1885)の大阪大洪水により、上流より流されてきた流木等が引っ掛かり市内に洪水の恐れが生じたため、やむなく工兵隊により爆破撤去されました。

⑩ 川口居留地

明治元年(1868)7月29日、明治政府は道路と街区を外国人の指示通りに造成して治外法権の外国人居留地をつくり、26区画の永代借地権を競売しました。しかし川の水深が浅く、大型船の出入りに不便なため、多くの外国商人は、神戸居留地へ移転しました。その後、明治19年(1899)7月に居留地が撤廃されるまでキリスト教会や学校・病院などが立ち並び、外国人が散歩するなど、大阪の文明開化を象徴する場所として、異国情緒豊かな雰囲気漂わせていました。

⑪ 川口キリスト教会

明治2年(1869)、長崎からやってきた米国聖公会宣教師C.M.ウィリアムス主教が英学講義所を開校して、英語による礼拝を始めました。明治14年(1881)に教会が設立され、大正9年(1920)に現在の礼拝堂が建設されました。平成7年(1995)の阪神・淡路大震災では礼拝堂も大きな被害を受け、一時は取り壊しかと思われましたが、信者の力に助けられ、平成10年(1998)に復元されました。ゴシック風の重厚なデザイン、美しいバラ窓などが、居留地時代の面影を残しています。

⑫ 大阪府庁跡

大阪府庁は中央区本町橋付近にあった西町奉行所を流用していましたが、明治7年(1874)に西区江之子島に移転。川口居留地に近く、西欧の文化制度を移入するに好適だったこと、大阪は将来、西に向かって発展すると予想されたため、府民は「江之子島政府」と呼びました。一時期は路面電車が通って江之子島にも停車場が作られ、築港から川口、江之子島と経由して梅田停車場まで乗り継ぎが可能でした。しかし大阪の港は水深が浅く、大型船が入港できないことから、関西圏の貿易港は神戸に移行してしまい、大阪府庁も大正15年(1926)には大阪城付近に移転してしまいます。その後、江之子島旧庁舎は工業奨励館として活用されていましたが、太平洋戦争の空襲で惜しくも全焼、その後解体されてしまいました。

⑬ 津波・高潮ステーション

大阪府西大阪治水事務所が所轄する防潮堤や水門の津波・高潮防御施設の一元管理を行う「防災棟」と、府民の防災意識の向上を目的とした「展示棟」を併せ持つ施設です。かつて大阪を襲った高潮や、近い将来必ず大阪を襲うと言われている東南海・南海地震と津波についての正しい知識を習得するとともに、地震、津波発生時の対応などを学べます。